
枯葉に塗る色

富田 惣七

自然科学的に言うと、動物や植物の色は生きており、人間が作った顔料や染料の色は命のある色ではない、と言えるかも知れません。

夏の木立の中に入つて見上げる梢の色は、みづみづしくて、緑したたるといふ言葉がなるほど思われるように光つてみえます。そこには生命が溢れていて、だから、折りとられた枝は、みるみるうちに死んでいくのが分る様に色あせていきます。

若い人の膚の色の美しさも同じです。はりきつていて、すべすべしていて、そこには生命の燃焼がなまなましく光つてみえます。

こういうように、自然の世界の中で、いのちのあるもの、色は、生き活きとして見えます。ですから、一応は、これに比べると人間が作り出した色は生きものではないように思われるのです。

トタンに塗られた緑色のペンキは、どう見たつて、みどりしたたる色ではありません。金魚のあの美しいパーミリオンの、なかば透明なようで、それでいて鮮明に光つてみえるあの色は、ちよつと絵具では出しようがないと思われます。

わたくしは以前、植物の標本に色づけをしたことがあります、その時によく、そういう事を感じていました。あの生きたみづみづしい緑を、この枯れた葉の上に絵具で再現することは一体可能なのだろうか、と。

これは私にとっては、枯れた葉に関する問題としてだけでなく、相当大きな問題のようでありました。それでいろいろと考えてみたわけです。

そしてこんな考えにたどりつきました。

人間は自然に近づきたいことを願つて色を作る。色が作られていく過程には、たしかにそういう一面があります。

しかしもうすこし考えてみますと、それだけではなくて、近づきたいという願いと同時に、自然と向いあいたいという願望もあるのです。自然に近づきたい、そして自然と向かい合いたい、そういう願いの中から色が生れてくる。これが順当な考えのように思われます。

自然に近づくということは、自然と完全に一つになるという事ではなくて、大変よい状態で自然と向いあえる様な位置に近づいていく、という事であります。

自然に、都合のよい位置で向いあう、自然に対する正しい位置を守る。これが自然に対する美しい、人間的な態度のように思われます。人間の表現活動というのは、実はここから生れてくるのではないのでしょうか。即ち色はここから生れてくるのではないのでしょうか。正しい位置で自然に向いあつて、つくづくとそれを見つめ、その尊厳で偉大な相貌を、ここにあかして、それを人間の道の何かとしたい、そういうところに、表現のみなもとがあり、色の出生のわけがあるのではないのでしょうか。

そういう時、作られた人間の色は、必ずしも死んだ色ではなくて、人間が自然に向つて何かをなそうという心の働きの中に生きた色となるのではないかと思います。

枯れ葉に塗られる色は、現実光の中に生きて在る色に近づこうと努力をしますが、しかしそれは程よいところで、前へ進むことをやめ、こんどは、作られた色として、正しく自然に向いあつた位置にとどまりながら、充分に自分の仕事を果そうと努力をすればよいのでしよう。

そこに、その色が作られていながら、深く自然とつながるものとなるのだと思います。

福井高等学校教諭

註

動植物標本の退色は吾々博物館人にとっては悩みの種です。特に展示標本が色あせて見る影もない姿となつたとき、何とも言い現しようのない淋しさを感じるのである。

外気にさらされ、太陽光線を浴びる腊葉標本は日一日と目立って退色して枯葉の陳列となつてしまふ。こんなみじめさを少しでも救おうと、腊葉に彩色して陳列して下さつたのが富田氏である。当館の高山植物の展示腊葉はすべて真実に近い彩色が施されて、常に新鮮さを保っているのはこのためである。

彩色の技法についてはいずれ執筆してもらいたいと思つているが、お聞きするところではそれ程困難なことではないらしい。

小林 記